

ここに愛がある

ヨハネの手紙第一 4章 9-10節

はじめに

「クリスマス」という言葉を英語で書くと分かりますが、「Christ」つまり「キリスト」という言葉と、「Mass」つまり「ミサ」「祭」という言葉が組み合わされている言葉です。ですから、「クリスマス」というのは、本来「キリストのミサ」「キリストの祭」のことと言えます。しかし現代においては、このクリスマスの本来の意味は失われて、キリストとは全く関係なく、クリスマスが祝われるようになっていました。ある人は、こんなことを言いました。「教会でもクリスマスをやるんですね」。この言葉は、現代のクリスマスを象徴しているような気がします。クリスマスは、「キリストのミサ」「キリストの祭」ですから、本来は教会でこそ祝われるべきものです。しかし現代では、教会のクリスマスは細々と祝われ、教会以外の所でクリスマスが華やかに祝われるようになっていました。

1. オー・ヘンリーの『賢者の贈り物』

クリスマスというのは、四世紀頃から祝われるようになったと言われていますが、この長い歴史の中で、世界各地でクリスマスにまつわる様々な物語が生まれてきました。その一つに、オー・ヘンリーの『賢者の贈り物』という物語があります。主人公は、ジムとデラという貧しい夫婦です。

クリスマス・イブの朝、妻のデラは、夫のジムにどんなクリスマスプレゼントをあげようかと考えていました。そこで、コツコツ貯めていた小銭を数えてみましたが、何度数えてみても、1ドル87セントしかありませんでした。これでは夫のジムに十分なクリスマスプレゼントを買うことができません。そこで妻のデラは、ある決心をします。それは、自分の髪の毛を売る決心でした。彼女の髪の毛は、膝まで届く長い綺麗な髪の毛でした。彼女は自慢の髪の毛をバッサリと切って、それを売り、20ドルを手に入れたのです。彼女は、そのお金を握りしめて、町中を歩いて、夫のジムが宝物にしていた銀の懐中時計につける「プラチナの鎖」を見つけたのです。その「プラチナの鎖」の値段は、21ドル。髪の毛を売ったお金と貯めてきた小銭を合わせれば、ちょうど買える値段でした。

クリスマス・イブの夜、いつものように夫のジムが帰って来ました。ジムは玄関を開けた途端、妻のデラの髪の毛が少年のように短くなっているのを見て、大きなショックを受けました。夫のジムがショックを受けたのは、ただ単に妻のデラの姿が変わっていたからではありません。実は夫のジムは、妻のデラへのクリスマスプレゼントとして、彼女の長い綺麗な自慢の髪の毛を飾るために、宝石で縁取られた鼈甲の櫛を買ってきていたからで

す。そして夫のジムは、それを買うために、宝物にしていた銀の懐中時計を売っていたのです。そのため二人のクリスマスプレゼントは無駄になってしまいました。しかし二人は、お互いを喜ばせようとして、自分の一番大切は物を犠牲にしたのです。それゆえ、二人はお互いの「愛」をクリスマスプレゼントとして受け取ったのです。

オー・ヘンリーは、この物語の結びでこのように言っています。「最後に一言、今日の愚か者たちにこうっておこう。贈り物をするすべての人たちの中でも、この二人がもっとも賢かったと。贈り物をし、贈り物を受け取るすべての人々の中で、彼らのような人たちこそが、最も賢いのである」。オー・ヘンリーは、なぜこの物語を書いたのでしょうか。それは、「今日の愚か者たち」へのメッセージを語るためでした。今日のクリスマスは、華やかになる一方で、大切なことが失われている、そのような思いが込められているのだと思います。では、今日のクリスマスにおいて見失われている大切なものとは何でしょうか。それは、「愛」だと思います。しかもその「愛」というのは、ただの「愛」ではなく、自分の一番大切なものを犠牲にするという、自己犠牲的な「愛」だと思います。

2. 神の「アガペー」の愛

クリスマスは、「キリストのミサ」「キリストの祭」ですが、そこでキリストの何が祝われるのでしょうか。それは、キリストの誕生です。キリストがこの世に生まれたことを祝うのが、クリスマスです。先ほど読みました聖書の箇所には、キリストがこの世に遣わされたこと、つまりキリストがこの世に生まれたことこそ、「神の愛」の現れであると言われています。

新約聖書はもともとギリシヤ語で書かれましたけれども、ここに出てくる「愛」という言葉は、「アガペー」という言葉が使われています。それは、自己犠牲的な「愛」を表す言葉です。聖書は、イエス・キリストがこの世に生まれたということ自体が、神様の愛の現れである、しかもただの愛ではなく、神様の自己犠牲的な愛の現れであると言っているのです。

なぜでしょうか。なぜイエス・キリストがこの世に生まれたこと自体が、神様の自己犠牲的な愛の現れなのでしょう。イエス・キリストがこの世に生まれたことと、神様の愛というのは、どのように関係しているのでしょうか。先ほど読んだ聖書の箇所によれば、イエス・キリストは、「私たちの罪のために、宥めのささげ物として」、この世に遣わされたとあります。イエス・キリストは、ただ単にこの世に生まれたのではなく、実は神様からこの世に遣わされた神様のたった一人の子どもであると聖書は語っています。では、イエス・キリストは何のために、この世に遣わされたのでしょうか。それは、「私たちの罪のため」であったと言うのです。

「罪」とは、何でしょうか。罪とは、法律に背くことと言えるかもしれません。日本の法律に背けば、日本において犯罪者とされ、罰せられることになるでしょう。しかし聖書によれば、実は私たち人間は、神様に造られ、命を与えられ、生かされていて、その神様

の法律の中で生きるように、本来定められていると言うのです。その神様の法律というのは、モーセの「十戒」にまとめられています、一言で言えば「愛」に生きることです。神様が、私たち人間に求めていることは、「愛」に生きることです。私たちが造られた神様を愛し、神様が造られた人を愛して生きることです。その意味で、聖書が「罪」と呼んでいるのは、神様を愛さないことであり、人を愛さないことなのです。私たち人間を造られ、命を与え、今も生かしてくださっている神様を認めず、背を向けて生きること、それを「罪」と呼んでいるのです。そして、人を憎み、人を傷つけ、人を妬み、人に無関心でいること、それを「罪」と呼んでいるのです。一言で言えば、神様も愛さず、人も愛さず、ただ自己中心に、自分本位に生きること、神様よりも人よりも、自分の欲に従って生きること、それを、聖書は「罪」と呼んでいるのです。その意味で聖書は、人間はみな、神様の前に罪を持っている、神様の前に罪を持っていない人は、この世に一人もいない、人間はみな、神様の前に「罪人」とであると教えているのです。

しかも神様は、私たち人間のその「罪」に対して、激しい怒りを持っていると言うのです。そして、その激しい怒りのゆえに、私たち人間に対して、この世においても、永遠においても刑罰を与えようとしておられると言うのです。神様は決して罪を見逃すことはできない方です。神様は愛に満ちた方ですが、同時に正義に満ちた方でもあります。それゆえ、神様は私たち人間の罪を、軽く水に流すことはできないのです。

しかしただ一つだけ、私たちの罪を水に流す方法があるのです。それは、神様の激しい怒りを「宥める」ことです。イエス・キリストは、「私たちの罪のために、宥めのささげ物」として、神様から遣わされました。イエス・キリストは、神様の激しい怒りを宥めるために、この世にお生まれになったのです。では、イエス・キリストは、どのように神様の激しい怒りを宥めたのでしょうか。それは、私たち人間の罪を背負って、十字架で死ぬことを通してです。十字架とは死刑の道具です。十字に組み合わされた大きな木に、両手両足を釘で打たれて張り付けにされ、長時間血を流して苦しみ、人々の前に晒され、最後には息絶えて死んでいくのです。イエス・キリストは、この十字架の死を通して、私たち人間の罪を、神様に対して償われたのです。十字架刑は、神様に呪われた者が受けるものでした。イエス・キリストは、私たち人間に対する神様の激しい怒りと呪いを、私たちに代わって十字架で受けられたのです。そして神様は、私たち人間の罪に対する激しい怒りと呪いをすべて、十字架のイエス・キリストにぶつけられたのです。

神様は、正義に満ちた方であると同時に、愛に満ちた方でもあります。神様は御自身の正義を貫くと同時に、私たち人間に対する愛を貫くために、御自身のひとり子イエス・キリストの命を犠牲にされたのです。神様は、御自身の激しい怒りと呪いから、私たち人間を救うために、ひとり子イエス・キリストをこの世に遣わし、十字架に付けたのです。これが、イエス・キリストがこの世にお生まれになったというクリスマスの背後にある、神様の愛、すなわち自己犠牲的な「愛」なのです。

おわりに

イエス・キリストがこの世にお生まれになった、そのことの背後には、神様の自己犠牲的な「愛」があるのです。だからこそ、イエス・キリストがこの世に生まれたことを祝うクリスマスには、この自己犠牲的な「愛」が決して見失われてはならないと、オー・ヘンリーは、『賢者の贈り物』を書いたのではないのでしょうか。

クリスマスには、私たち人間に対する神様の愛が込められています。その愛を、皆さんに信じ、受け入れていただきたいのです。神様は、御自身のひとり子の命を犠牲にするほど、私たちが愛していること、イエス・キリストは、私たちの罪のために十字架で死なれたことを、ぜひ信じ受け入れていただきたいのです。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちが愛し」とあるように、神様の愛は一方的です。どうかその愛を決して拒まず、信じ受け入れて、「いのち」に与っていただきたいと心から願っています。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、あなたに造られ、命を与えられ、生かされている存在です。しかし、私たちは生まれつき罪の性質を持ち、自己中心に、自分本位に、自分の欲を満たすために生きてきました。あなたを認めず、あなたに背を向けて、人を傷つけ、人を妬み、人に無関心に生きてきました。しかしあなたは、そんな私たちのために、ひとり子イエス・キリストをこの世に遣わし、宥めのささげ物として、十字架に付けられました。そうしてあなたは、御自身の愛と正義を、私たちに示してくださいました。どうか私たちが、このクリスマスの時に、自らの罪を悔い、あなたの愛を信じ受け入れることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。